

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 米大統領の英語 (74)

(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後 藤 寛

政治言語(political language)の意味解釈を今回は3例で見てみる。超高速黙読(super-rapid silent reading)により textual pattern practice を積むことで徐々に英語力もついてくる。母語話者の英語読みの呼吸法を意識し stopwatch で秒速測定しながらの高速読みで、実際に発話されたものとも想定したい。

(1) As I learn more and more each day, I am coming to the conclusion that what is taking place is not an impeachment, it is a COUP, intended to take away the Power of the people, their VOTE, their Freedoms, their Second Amendment, Religion, Military, Border Wall, and their God-given rights as a Citizen of The United States of America! 😏 (October 1, 2019)

▲これはウクライナ疑惑に関し Trump 氏の弾劾が叫ばれていた頃の彼の総括的な思いであった。1文で書かれている旧 tweet である。「日ごとに分かってくるが、結論的に目下の状況は弾劾などというものではなくクーデターだ。人民の権利、選挙権、自由、米国憲法修正第2条(銃の所持権)、信教、軍事、国境の壁、神から与えられた米国市民としてのこれらの権利を奪おうとするものだ!」という内容である。

ウクライナ疑惑(Ukraine allegations)とは、Trump 氏が 2020 年の大統領選で政敵となる前副大統領で民主党の Joe Biden 氏が不利になるようウクライナ政府に働きかけをしたとされたものであったが、これに関しては本連載(18)の冒頭で扱った。Trump 氏の心情を推し量れば emoticon は上のようなものか?

太線語 impeachment (弾劾) に関しては本連載(18)ですで見ただけであるが、印欧祖語の語根音素系 PIE etymonn の/PED/に由来し「足」が原義である。これが直感できれば音感・語感で相当なレベルに達している証しとなる。{im (= in) + peach/pede (= foot)}は「中に足を入れること」→「足かせとなること」→「妨げること、邪魔すること」の意味である。非世界語彙での同系語に pedal (ペダル)、pedestrian (歩行者)、expedition (遠征・探検)、pedometer (万歩計)、tripod (カメラの三脚) などがある。プラス α Basic 世界語彙の path (小道) も同系であるし、語頭子音が[f]となった Basic 世界語彙 foot と同系である〔これは本連載(18)の冒頭、(70)の(1)、(71)の(2)で扱ったがさらには拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(26)参照〕。

なお、文中の下線語 what は、事柄の整理法上重宝な語で英語での使い方で存分に慣れたい。freedoms, rights の s、また Citizen の a での単数形にも注目でこの場合はこれでよい。こういう a(an), the のいわゆる冠詞のことを Basic 世界語で Ogden は (p) words と称しているが、括弧内に入る p で始まる 1 語は? Basic 世界語は意味の本質を見通す。pointing でよい。要するに冠詞とは指示語のことである。

ところで、この(1)の文例を読み込むと本連載前回(73)で触れた数学的な等式とともに、その左辺と右辺の項の位置の入れ変わりに応じて符号の+と-が入れ替わる移項(transposition)の考え方が感じられないか? この text 文例の背景に copula (連辞) の 'be' を軸に意味が動いていることを感じる〔本連載では copula を COP として text 文の pattern を示している〕。前回、数学的移項を① $A + C = B + C$ 、② $A - C = B - C$ 、③ $AC = BC$ 、④ $A/C = B/C$ ($C \neq 0$) として示したが数学では等式 $A = B$ と $B = A$ は同等なものとする。

一方、言語での意味の本質は $A = A$, $B = B$ で、これは本連載(63)などで確認した MEANING MEANS MEANING. ということになる〔Ogden-Richards, *The Meaning of Meaning*, p.171 参照〕。

前回引き合いに出したが、G. Orwell の考えた全体主義(fascism)世界での新話法 Newspeak で War is peace. ($A = B$) を Peace is war. ($B = A$) と項を入れ替えたなら意味はどう変わるか? 世界の偉大な 7 書の 1 つとして EP 本 III, p.51 の図絵で N. Tolstoi 著 *War and Peace*『戦争と平和』を見るが〔本連載(68)参照〕、本連載での text 文も War or Peace? (戦争か平和か?) のテーマを心に描き、冒頭で言った反復による silent reading (黙読) で textual pattern practice を積むとよい。意味の動きを素早く追っていきいたい。

(2) I think that Crooked Hillary Clinton should enter the race to try and steal it away from Uber Left Elizabeth Warren. Only one condition. The Crooked one must explain all of her high crimes and misdeemeanors including how & why she deleted 33,000 Emails AFTER getting "C" Subpoena! 😏 (October 8, 2019)

▲Trump 氏が Hillary Clinton 国務長官(当時)に 2020 年の大統領選に立候補してはどうかと言っている tweet であった。「ねじれ者の Hillary Clinton は立候補し超左派の Elizabeth Warren を乗っ取ってみたらよい。ただし 1 つ条件がある。Hillary は自分の犯罪と違反行為を説明することだ。議会("C" = Congress) から召喚状を受け取った後に 3 万 3 千通のメールを消去した方法と理由を明らかにする必要がある!」という内容で、この後半部は Trump 氏が在任中に何度も一貫して主張していた。

これに対し翌日に Hillary Clinton 氏が次の返信 tweet をした。それを提示しておく。

Don't tempt me. Do your job. @HillaryClinton (October 9, 2019)

“挑発しないで。ほっといてちょうだい。@ヒラリー・クリントン”であった。彼女の折り返しの返信にはメディアも特別に注目し、上の Trump 氏の tweet とともに当時何かと引き合いに出していた。ここでの語 tempt の使い方とともに Don't tempt me. Do your job. という言い方には注目しておいてよい。tempt は Basic 世界語彙 **attempt** (試してみる) ともちろん同系。なお、日本語の「試してみる」「やってみる」等々での「みる」は五感(five senses)での視覚的な「見ること」(seeing)の意味に由来する〔後述もする〕。

下線の Uber (ウーバー) とは Super の意味である。misdemeanors, subpoena は文脈から負のイメージ語と推測したい。また 5W's and 1H での how & why という事の在り方を詰めていく言い方には何かと注目したい。Subpoena[səbpí:nə] (召喚状・呼び出し状) は Basic 世界語彙によりどこを求めれば **punishment** が同系語としてある。音感から直感できれば見事だろう。penal[pí:nəl] (刑罰の) と同系。

太線語 delete[dilí:t] (削除する) は lete[lí:t] に原義があることを見て取りたい。側音(lateral)の[l]をもつ語はしばしば「なめらかで滑ること、流れること」の意味をもつが、これも Basic 世界語彙によりどこを求めれば[sl]音をもつ **slip, sleep, slope**、プラス α Basic 世界語彙 **slide** (本来、顕微鏡の検査物を載せるスライドの意味で用いる)、非世界語彙 **slight** (わずかな)、**sleeve** (袖)、**sleigh** (ソリ) などと同系である。このあたりに関しては本連載(4)の①、(58)の(1)ですでに扱いはした〔同上拙著、第二部、例(77)参照〕。

なお、Congress (議会) の gress は「進む、進めること」で、un-Basic 語 **progressive** などからも想像はつくだろう。実は Basic 世界語彙の **degree**、非世界語彙の **grade, degrade** もこの系統の語で同系である。要は Basic 世界語彙をよりどころとすればすべて解ける。

ところで上での「メールの削除」とは存在した文書が有から無となるということで、まさに哲学的な ontology (存在論) の問題ともなるが、G. Blocker の *The Meaning of Meaninglessness* 『無意味の意味』に次の下りがある〔破線は原文どおり、下線は筆者〕。

In our everyday attitude we see things as tools, instruments “for writing, sewing, working, transportation, measurement ;” things are “essentially ‘something in-order-to ...’.” Thus we project from our human standpoint a purposive relation on things, fixing them as means to some human end, an “assignment or reference of something to something.”

— G. Blocker, *The Meaning of Meaninglessness* (pp.39-40)

すなわち、人間は日常的に物質を instrument (道具) として見るのであり、その物質は本質的に何らかの目的性(telicity)を有している。人間は物質にその目的性を投影・射影し、ある種の役割や指示をすると言っている。本連載(68), (72)で触れたアリストテレスの四原因のうちの「目的因(final cause)」と重なる重要なポイントで世界 (実在界) の在り方の切断である。日常的メールなら受信者に「読ませる目的のために存在するもの」である。なお、instrument には法律上での「文書、証書」の意味もあり常識的に用いられる。

〔以下、スペイン語翻訳版もある tweet (2018.01-05)より — 2言語対照〕

(3) Rasmussen and others have my approval ratings at around 50%, which is higher than Obama, and yet the political pundits love saying my approval ratings are “somewhat low”. They know they are lying when they say it. Turn off the show — FAKE NEWS! 😏 (March 11, 2018)

cf. Rasmussen y otros tienen mi índice de aprobación alrededor de 50 %, mejor que el de Obama, y aún así a mis críticos políticos les encanta decir que mi aprobación es “algo baja”. Saben que mienten cuando lo dicen. ¡ Apaguen el show — MEDIOS FALSOS ! (11 de marzo, 2018)

▲「世論調査機関ラスムセン社などの調査では私の支持率は約 50%で、これは Obama 大統領より高いものだが、それでも政治に関する学者先生たちは私の支持率は“やや低い”とコメントしたがる。彼らがそう言うときには自分たちが嘘を言っていることを知ってのことだ。茶番な見世物はやめるべきだ — 偽報道だ!」という内容である。Trump 氏のあきれ返った心情を伝えている。emoticon は上のようなものか?

下線部 higher than Obama は higher than Obama's が正式で、対応するスペイン語のほうは mejor que el de Obama = higher than that of Obama で、支持率の「50%」と比較する正式な言い方となっている。

太線語 yet (依然として) の PIE etymon は/ES/ (/EST/)で、「存在すること、そうあること(be)」が原義である。本連載(56)の(1)で扱ったが Basic 世界語彙の **present, representative, interest**、また実は yet は **yes** と同系である。yes は ‘may it be so’ (そうあれ) が原義〔同上拙著、第二部、例(36)参照〕。

太線語 pundits (学者) は文脈から推理したい。やや気取った語である。スペイン語のほうで críticos políticos (= political critics)と訳されているように「政治評論家」でよいが、pundits はいわゆる学識経験者のこと。ただ、この語の由来は奥が深い。pedantic (学者ぶった) という軽蔑的なニュアンスのある語とも同系列の語である。さらに pedagog(ue) (教育者、教師)、pedagogical (教育者の)、また pedagogy / pedagogics (教育学) という語もある。じっくり見て語根部の ped に注目すればよい。プラス α Basic 世界語彙 **encyclopedia** (百科事典) も同系。一方、上の(1)でも触れたが ped は「足」を意味し Basic 世界語彙

では[p]→[f]の **foot**、またプラス α Basic 世界語彙 *path* も同系であることを確認しておきたい。

「足」とは何を意味するか？文献を紐解いていくと *pundit* など一連の語群の原義(*root sense*)は一方で「小さいもの、子供」の意味でもあったらしい。「手取り足取り子ども扱いするような教育法、教育者」のような負の語感をもつ語群だとも考えればよかろう。たとえば *That's a pedantic way of teaching.* というかどうか？なお、「子供」といえば医学の分野で常識的な *pediatrics* (小児科学) という語もある。

中世ヨーロッパの学校での7つの教養科目(*liberal arts*)に関しては本連載(47)などで触れたが、いずれも美的情操(*aesthetic sensitivity*)を培う科目でもあった。その中でも特に算術(*arithmetic*)や幾何学(*geometry*)はフェイクでない真を追究する科学で美的調和感(*beautiful harmony*)を求めるものとなるが、1970年代初頭に理論物理学で2人の日本人研究者が論文で用いた3つの数式 ① $4 = 2 + 2$, ② $4 = 2 + 1 + 1$, ③ $4 = 1 + 1 + 1 + 1$ がその約半世紀近く後(2008年)に宇宙の秩序を解明するものとしてノーベル賞受賞にもつながったが、C. K. Ogden, I. A. Richards, J. Wood らの言語哲学思想がその後 *Básic Énglish* という一美的な言語体系の発見ともなった背景に、実はやはり古代ギリシャ以来の算術や幾何学があった。

美的と言ったが、C. K. Ogden, C. K. and Richards, I. A. (1923)の *The Meaning of Meaning*『意味の意味』以前に、本連載(69)の(2)で触れた Ogden, C. K., Richards, I. A. and Wood, J. (1921)の *The Foundations of Aesthetics*『美学の基礎』があった。‘beautiful’ という語の意味概念に関しては本連載(65)の(2)ですでに確認したが EP 本 II では p.138 で初出となり、p.143 の末尾では *There is no measure of the beautiful.* と象徴的にも示される〔*The Meaning of Meaning* (Chapter VII, pp.139-159 [10th ed., 1952])参照〕。EP 本 III も II での流れを受けた形となる最初の数頁程度は別にしても、実際にはそれ以降が問題となろう。総括的には全頁の Basic 実践が望まれる。上級レベルの意味論実践としてさらに **EP 本は IV が必要**だろう。

ところで上のスペイン語文中での *show* は英語の *show* をそのまま用いている。ただ、英語の *show* [ʃou] とスペイン語の *show* [ʃou] は実際はかなり違う音響となる。スペイン語音は英音からすればもっとまろやかな音となる。英語の場合は吐息音となり実際には [ʃ^hou] のようになり、生粋のネイティブによる自然な発話(*vocalization*)中で響くこの音は日本人の発話中でのものとはかなり違う。

英語の音響といえば、かつて港ヨコハマ野毛の丘にあった放送局・ラジオ関東(現ラジオ日本)からウィークデイの深夜に必ず流れた知人ぞ知るあのロマンチックで美しさの漂う音楽番組 ‘*The Port Jockey*’ での日系二世 DJ・ケン田島(Ken Tajima)氏の冒頭アナウンス “*Morinaga presents ‘The Port Yokohama Seaside Inn’!*” とは一時期違ったことのあったアナウンス “*Morinaga presents ‘The Port Jockey Show’!*” での *Show* の響きにこの語の真音を聴いた(学生時代のことである)。Jockey[dʒoˈki]の末尾音[kɪ]から *Show* の [ʃ^hou] へと移行したときのケン田島氏の呼吸法から出たあの野性味漂う本物音が今なお脳裏に焼きついている。郷愁の念から筆者はあの美しい港ヨコハマが一望できる野毛の丘の旧ラジオ関東跡地(現在は駐車場となっている)を何度も訪れてきた。そのたびに氏の番組冒頭と末尾の英語アナウンスを想い起こし心の中で復唱した。そのときの筆者の心中を *emoticon* で示せば 😊 となる〔このあたりは何年も前、当時の本会 Newsletter で特別に *essay* として 10 回ほど連載したが、今も本会事務局に残っているはずである〕。

なお、*show* の語頭音で無声後部歯茎摩擦音(*voiceless postalveolar fricative*) [ʃ] と関わることでついながら触れておくと、これと無声歯茎摩擦音(*voiceless alveolar fricative*) [s] の本物調のものの響きにも要注目である。しばしば日本人の英語を評し “あの人の英語は綺麗(きれい)である” と言うことがあるが、この「綺麗」という言葉を聞けばそれは本物とは違うと理解してよい。[ʃ] や [s] の摩擦音化が強すぎなはずである。これが強すぎると綺麗のように聞こえるだけで実は本来の英音での摩擦音(*fricative*)ではない。

ただし上記、ケン田島氏の発するあの綺麗な英音は、綺麗さ(*beautiful*)の中身の違う野性的で美的な本物調であった。元来、筆者の興味の対象はむしろアメリカ人などより風貌が日本人で英語が本物の二世や三世の人であった。ケン田島(Ken Tajima)氏以外には、在日アメリカ大使館の通訳官であった二世のセン西山(Sen Nishiyama)氏はこれまたまさに本物調の英語を披露した人で懐かしい。タレントではマイケル富岡(Michael Tomioka)氏などのあの DJ 調英語を聴く機会がもう長い間ないが残念である。

ここでのスペイン語 *otros, índice, aprobación, mejor, aún, así, mis, críticos, políticos, baja, medios, falsos* は、英語のそれぞれ **other, index, approval, major, even, yes, my, critics, political, base, media, false** に対応すると同時に同系語である(太字体は Basic 世界語、イタリック体はプラス α Basic 世界語)。太線の *aún así* は *aún = even, así = yes* である。スペイン語はアクセントの規則から外れるものにはすべてアクセント符号を付け、きわめて規則的なものとなる。音声面からも日本人の民族聴覚に馴染みやすい。

上の *tweet* に *They know they are lying when they say it.* という文を見るが、階層構造での3つの文から呼吸法との絡みでリズムカルにもなる。今回これをまたも逆さ読み〔本連載前々回で言った筆者の呼称 *mirror-image reverse reading* (鏡映逆さ読み)〕により文を内在化(*internalize*)する手法を確認しておこう。they say it → **when** → when they say it → **they are lying** → they are lying when they say it → **they know** ⇒ **They know they are lying when they say it.** のように復唱し、その階層構造とリズム感を味わうとよい。次にこの文を弱音系と強音系の語に2分割することで見ておく。

語の弱音・強音で感知する英音の心的2拍子リズム(mental prosody)

(弱音系)	(強音系)
They	know
they are	lying
when they	say
it. //	

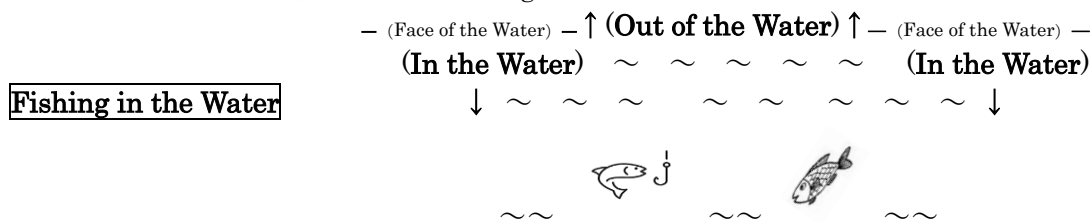
この They know they are lying when they say it. で3つの現在時制には要注目。そもそも英語の時制(tense)には「現在時制」と「過去時制」しかなく未来時制の動詞形はない。たとえば EP 本 I, p.14 で初出となる文 He will take his hat off the table. は mode (叙法) 的に発話時の心の持ち方であり、will take は未来時制ではない。観念的時間(time reference)は未来でも、言語的時制(tense name)は未来時制ではない。本連載で注目している位置格(locative case)の観点からすれば will take は「今 take ‘してみる(見る)ところ(所)’ である」と言うておこう [cf. be going to [be = am, are, is, was, were]]。一方、be taking は「今 take ‘試みて(見て)いる・いたところ(所)’ である」、took は「もう take ‘試みた(見た)ところ(所)’ である」の「場 (place)」の意味で field theory (場理論) と重なろう。Basic ではすべて operators (演算子) である。英語と違いラテン系のスペイン語やフランス語などでは動詞の形(form)が変わり未来時制がある [例: スペイン語 SP 本 I, p.11 の El hombre tomará el sombrero de la mesa. (= The man will take the hat off the table.)]。tense は完了・未完了など aspect (時相) とも関わる。

関連して、たとえば EP 本 I (Workbook, pp.178-179)での text 文例は時間(time)の概念と言語的な時制(tense)、時相(aspect)、here/there is 存在文(existential sentence)、see 知覚文(perceptual sentence)、そしてさらに付帯状況文(attached situation sentence) [p.179, 5]とも関わっていて EP 本 I 全体の語釈(lexical interpretation)からも注目しておいてよい文例であるが、実際にはその本来の趣旨は意外に把握されていないのではなかろうか? 本会で“EP 本実践で英語の基本を”と銘打つ限り明確にされてよい一例だろう。

Basic での基本 pattern 文は7要素の We will / give / simple / rules / to / you / now.で、willは後ろの giveではなく前の Weと結合すると見る [Ogden, C. K. (1932) *The ABC of Basic English*, p.183 での THE BASIC WORD WHEEL / PANOPTICON に7つの同心円の中心から見た最初の円に We will を見る]。

Basic では“There are no ‘verbs’ in Basic English.”とし、いわゆる品詞論的な助動詞(Aux.V)と動詞(V)の見方は排除した。双方とも数式的な four operations (四則演算) での operators (演算子) [+、-、×、÷] と見たわけで、力学的には槌 (てこ: lever) の働き(leverage)をする語(operation words)とした。

例として fishing (魚釣り) なら道具の竿であり、水面上の竿の槌作用で水面下の魚取り(getting fish in the water with a fishing rod)となる [上記や本連載(69)などでの case (格) の観点からは getting fish in the water が locative case (位置格)、a fishing rod (line & hook) が instrumental case (具格) となる]。



「釣り」は「水面上」と「水面下」で世界を2で割り水中を心の目(the mind's eye)で透かし見る(see through する)行為(act)となるが、ここにも2項の意味哲学を感じる [本連載(61)参照]。たとえば文 John is fishing in the river. なら、Basic には fish (魚を釣る) という動詞はなく fish (魚) というもの(thing)を竿で取る(get する) fishing という行為・作用・状態があるのみと見たこととなる。そもそも英語では fishing は上記 case (格) での locative case と instrumental case の融合(fusion)した perlativ case (通格) となる。

fish と命名され存在する生き物を catch (捕獲) しそれを have する (食べる) ため grill (焼く)、fry (揚げる)、boil (煮る)、steam (蒸す)、smoke (燻す) 等々、heating / heated (熱が加わる) や cooking / cooked (料理の手が加わる) などに変化する語はすべて動詞(V)ではなく operators と見るのが Basic 言語である。

前回での EP 本 II, p. 9 の She is brushing her teeth. や She is combing her hair. なら道具(instruments)としての brush (ブラシ) や comb (櫛) は存在するし、それを用いた brushing (ブラシがけ) や combing (櫛とき) の行為(acts) (doing the brushing / doing the combing)はあるが、Basic では brush や comb には動詞としての意味はないと見る。ポイントである [上記 Ogden, C. K. (ibid.), p.167 の図絵参照]。前々回に確認した Lexical Conceptual Structure (LCS: 語彙概念構造) から見る英語文での因果(cause-effect)の深層意味構造モデル [lx ACT-ON [ly CAUSE [BECOME [[ly BE-AT-[ON/IN/WITH] [lz]]]]] がここで改めて全面に出てきもする。

